●白球の系譜(第86回全国高等学校野球選手権大会)

このコーナーは、シティライト岡山の選手・スタッフの「あの日、あの時」の思い出を語ってもらうコーナーです。

今回は徳田善彦選手・山内大輔選手のあの夏の日の思い出を振り返ります。

◆このコーナーで使用している写真は、本人提供によるものです。

球明会ニュース2011年第1号(平成23年1月10日発行)
<通算発行第3号>
発行人/小橋諭吉　企画・編集/球明会事務局
〒701-0206岡山市南区箕島3981シティライトセンター2F
TEL086－282－8686

灼熱の太陽が照り注ぐ夏の日。一人の小学6年生が、テレビ画面に映し出される映像に釘付けになっていた。
岡山県勢が、はじめて決勝に駒を進めた第81回全国高等学校野球選手権大会。
小さな瞳は甲子園で活躍する岡山理大付属高校の虜になっていた。
「僕も理大の野球部で甲子園に出たい」いつしかそんな夢を抱くようになっていた。
3年という月日が流れ、その少年が選んだ進路は憧れの「RIDAIFU」
必死に練習に励み、2年生でレギュラーの座を掴んだ。
その夏、理大は岡山県を制し甲子園出場を決める。
1回戦の相手は、テレビで見た憧れの先輩たちが決勝で苦汁をなめた「桐生第一」
6番サードで先発出場した徳田は4打数1安打と活躍。大歓声の中、14－9で理大が辛勝。先輩たちの無念を晴らした。二回戦で敗れはしたが、徳田は甲子園を存分に満喫することが出来た。
翌年、最終学年となって迎えた夏の県予選。準決勝で玉野光南高に敗れ、高校生活にピリオドを打った。やりきったという思いから、卒業後は「野球を辞める」ことを決めていた。 選択肢は一般就職だった。
あれから5年。徳田は、今もこうして野球と向き合っている。こうして野球を続けてこれたのも「野球を通じ様々な事を学び、たくさんの人と出会えたから」と振り返る。
野球を通じ、出会った人は数知れない。入社2年目の春、あの男と再会した。

浜風が運んだ二人の高校球児

徳田善彦×山内大輔

【内野手・シティライトジャック店所属】　【外野手・㈱エル・エー・ピー所属】

創立100周年同士の対決となった県立岐阜商高 対 遊学館高戦。第86回全国高等学校野球選手権大会。山内大輔は徳田と同じく、この大会に県岐商の2番、センターで出場していた。
くしくも二人は、甲子園の開会式で出会っている。
当時の開会式の様子を二人に聞いてみると「東北高校のダルビッシュ有(現・北海道日本ハム)と横浜高校の涌井秀章(現・埼玉西武)の人気で開会式は、ごった返していた。」と現在、パ・リーグを代表するスター選手のファンの凄さに圧倒された印象しか残っていないと口を揃えて話してくれた。
山内が最後の打者となった試合は6-3で遊学館に軍配が上がり、山内の最後の夏が幕を閉じた。高校の先輩であり現・中部学院大の原監督の誘いを受け、進学。大学選手権にも出場した。卒業間近、原監督から薦められた企業チームは「シティライト岡山」。住川監督と原監督が昭和コンクリート時代の同期生という間柄で採用の話が飛び込んできた。徳田同様に「たくさんの人達が繋がっているのが野球界なんだと思いました」と山内は振り返る。
そして今、「開会式の時、ファンが凄かった」と共通の会話をしている二人の元甲子園球児が、ここ岡山にいる。
甲子園名物、「浜風」が、懐かしい想い出と共に、二人を運んで来てくれたのかもしれない。

Profile
とくだ・よしひこ●1987年(昭和62年)4月21日生、岡山県岡山市出身。172cm・75kg、右投・右打。岡山理大附高2年夏に6番サードで甲子園に出場。卒業後は三菱自動車工業㈱水島製作所に勤務。倉敷オーシャンズ(現・三菱自動車倉敷オーシャンズ)の選手として日本選手権本大会にも出場した。08年よりシティライトに移籍し、09年には自身初となる中国地区ベストナインを受賞した。
背番号5。23歳。独身。(写真左・左上は高校2年時の夏の甲子園)

やまうち・だいすけ●1986年(昭和61年)5月1日生、愛知県犬山市出身。県立岐阜商業高3年夏に2番・センターで甲子園に出場。
大学3年時には大学選手権出場。俊足とシェアな打撃を引っさげ09年、シテイライトに入社。
背番号24。24歳。独身。(写真右・右下は高校3年時の夏の甲子園)